

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 30

学校名・団体名	小千谷市立南小学校
HPアドレス	http://www.city.ojiya.niigata.jp/nansho/
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	ふるさとを愛し「ふるさと力」を生かした命の教育
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>当校は、小千谷市南部に位置する開校5年目の学校である。豊かな自然環境に恵まれ、子どもたちは伸び伸びと成長している。全校児童は107名で、それぞれがお互いのことを理解しており、仲はよい。しかし、人間関係は固定されがちで、互いのよさをもっと深く知ること、共感の気持ちを高めていくことが必要である。そこで、今年度の重点目標を、「自主性と共感～確立の年～」と定めた。共感の気持ちを高めていくには、自然や生き物との触れ合いの中で感動する心、生き物を自分事として大切にすること、命を大切にすることが大切である。そこで、ふるさと力を生かして、命の大切さを感じられる実践を、創意ある取組やこれまでの活動を発展させてテーマに迫っていく。</p>	

1 活動時期

- ① 4月～5月 ヤギとの出会い ヤギを飼いたいと思う意識の醸成
- ② 5月～6月 ヤギを飼うことへの課題整理 学校の許可をもらうこと ヤギ小屋の問題
- ③ 6月 ヤギ小屋設置のお願い ヤギ小屋制作 ヤギを迎える会をしよう 手紙を書こうなど
- ④ 7月 夏休みを迎えるに当たって 糞を堆肥にする方法
- ⑤ 9月 ヤギとの思い出 ヤギと遊ぼう ヤギの遠足
- ⑥ 10～11月 ヤギとお別れ会 ヤギにとっての幸せとは何か
- ⑦ 12～2月 ヤギと会おう いろいろな方へ感謝の気持ちを表そう
ふるさとのすばらしさ 命の大切さを考えよう

2 活動内容

①子ヤギ(たれちゃん)との出会い(飼うことへの必然性をもたせる活動)

当校は、開校当初から2年生が中型動物を飼育してきた経緯がある。しかし、「2年生だから中型動物を飼うのではなく、自分たちが世話をしないといけない、自分たちが責任をもって飼う」と1つの命を預かる覚悟の気持ちを高めてから活動させる必要性を感じてきた。

そこで、学区の農家の方の家で生まれた子ヤギとの対面を事前に行い、対象を具体的にした。対象が具体的になることによって、自分事として捉えることを期待したからである。生まれたばかりの子ヤギ(以下:たれちゃん)と触れ合うことをとおして、この小さな命を自分たちで守りたい、支えたいという思いを子どもたちは強くした。そして、ヤギを飼う意識が高まると、校長に飼育のお願いをする活動を設定した。飼うことへの責任感、命を大切にすること、仲間と協力して飼育する等の覚悟が全面に出る活動となった。その後、小屋の問題を投げかけた。今まで使っていた小屋では、ヤギにとっては、あまり適した環境ではないことを伝えた。すると、地域の方や保護者の方の中に、建築業の方がいることが分かった。子どもは、「大工さんにお願ひしよう。ぼくもできることをするから。」という声も挙がってきた。また、子どもの中には、「どんなものがあるとヤギにとっていいのか、農家の方にもっと聞きたいな。」といったヤギを自分事として捉え、何とかしたいという思いを高めていく様子も見られた。

②小屋の建設(地域と連携し、地域のよさを実感する活動)

子どもたちは、ヤギのために、地域の建築業の方に「小屋を建てていただけませんか。」とお願ひの電話をしたり、手紙を書いたりした。地域の建築業の方は、快く引き受けてくださった。小屋の設置を手伝ったり、見守ったりする子どもたち。その方の人柄や仕事の手際よさに「この地域に生まれてよかった。」「みんなが優しい小千谷の南部地域は最高だ。」と尊敬やあこがれの気持ちを抱く子どもも多く見られた。

③たれちゃんを迎える会(自分事として対象をとらえ、接する活動)

小屋ができあがり、いよいよたれちゃんを迎える準備は整った。たれちゃんのためにできることは何か、子どもたちは考えた。「歓迎のための歌をみんなで歌いたい。」「小屋に飾り付けをしたい。」「全校にもたれちゃんが来ることを伝えたい。」といった様々な思いを実現するために、自分たちのアイディアを生かして精力的に進めてきた。「たれちゃんを迎える会」は、小屋の建設にかかわってくださった方もお招きして、大変盛り上がった。

④日常の飼育活動(疑問をすぐに解決するための交流活動)

たれちゃんが学校にやってきてからの子どもの目はますます輝いた。朝登校すると、すぐにヤギ小屋へ行き、たれちゃんをなでたり、ヤギ小屋の掃除を始めたりするなど、たれちゃんが喜んでくれることを率先して行った。飼育活動をとおして、子どもたちが一番に知りたいと思ったことは、ヤギが食べてもよい植物と食べてはいけない植物である。そこで、定期的に農家の方からたれちゃんを見てもらおう活動を展開してきた。そうすることで、子どもが抱いた疑問をその都度、解決していくことや命を預かる責任の重さを感じられると考えたからである。

⑤たれちゃんの安全をみんなで守る活動(地域への呼びかけ活動)

農家の方との交流活動をとおして、ヤギにとって、球根は害があることを子どもたちは理解した。しかし、ヤギ小屋の近くには、チューリップやスイセンの球根が植えられており、それがたれちゃんのえさ箱の中に紛れていることがあった。ヤギ小屋は、道路に面したところに設置したので、地域の方が気軽にかわいがってくれるよさもあったが、球根をえさとして、混ぜてしまう恐れもあった。その実態を見た子どもたちは、たれちゃんを守るのは自分たちだと心を1つにして、球根を土から掘り出したり、小屋の掲示板に「球根は、ヤギにとっては害があるので与えないでください。」といったメッセージを送ったりした。自分事として、すぐに行動に移す姿からは、たれちゃんへの深い愛情が表れていた。子どもたちのがんばり、地域の理解により、球根がえさに紛れることはほとんどなくなった。

⑥地域の方とのあたたかな交流(えさやおがくずをいただく交流)

たれちゃんが小学校で飼われていることを地域の方も知り、頻繁に見に来てくださるようになった。給食の野菜を入荷してくださる業者さんは、野菜の切れ端を毎回持ってきてくださるようになった。また、地域の材木店の方は、ヤギ小屋におがくずを敷けるようにしてくださった。多くの方が、自分たちの活動を支えてくだ

さることを子どもたちは、味わってきた。一生懸命に活動すると、それを見て、応援してくださる方の存在に気付いた。そして、それらの方へ、ごく自然に感謝の気持ちをもった。

⑦たれちゃんの糞を肥料へと循環させる環境教育の視点に立った活動（ヤギの糞の活用）

現在、温暖化や自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然環境を守り、子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切である。そのためには、環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが重要である。特に、21世紀を担う子どもたちへの環境教育は極めて重要な意義がある。

今まで、中型動物の糞は、ごみとして捨てていた。近隣農家では、糞を堆肥に変え、畑に利用するなど、環境を循環させる取組を推進している。このノウハウを子どもたちに、ぜひ学ばせたい。そう考え、農家の方から来校いただき、環境教育の視点で話をさせていただいた。子どもたちは、話を聞き、循環型の環境をつくっていくこと、守っていくことの大切さを感じてきた。そこで、たれちゃんの糞や食べ残したえさを堆肥にする活動を進めることを推進した。毎日の清掃活動をとおして、子どもの意識の中に、「糞は汚いものではなく、堆肥として立派な肥料となるもの」というふうに芽生えてきた。

⑧たれちゃんの飼育を通して、命の大切さを考えさせる活動（いただくという意味の活動）

たれちゃんの飼育を通して、子どもたちはたれちゃんと強い心のつながりを感じたり、社会と進んでかかわったりしてきた。しかし、今回の活動をとおして、一番子どもに考えさせたいと思ってきたことは、命の大切さである。ヤギは家畜である。最後は、人のために食料となる。「かわいそうだから肉は食べない。」という考えもある。しかし、命は、食べることによって循環していく。食事の前の「いただきます」は、「命をいただく。そして、いただく命に感謝する。」という意味がある。このことを子どもに考えさせたいと思ってきた。そこで、ヤギ飼育の達人の方を学校に招き、命の授業をしていただくことを企画した。講師の方からは、以下の話をいただいた。「ヤギは、ペットではなくて家畜です。家畜は、人間の生活に恵みを与えてくれる動物のことを言います。世界中でヤギは大切に飼われて、乳が役立っている動物もいます。乳だけでなく、肉や皮や毛も、人間の生活に使われます。みんな肉を食べますね。豚、牛、鶏。ヤギも、同じように、肉になります。雄のヤギは、大きくなったら、草刈りの仕事などをして、最後には肉になります。肉は、動物の命の恵みなんです。必要な分を残さずに食べることが、命を大切にすることになります。」子どもたちの心に届くように語りかけていただいたおかげで、命の重みと尊厳について、子どもたちなりに思いや考えを深めることができ、有意義な会となった。

⑨たれちゃんの卒業式（たれちゃんとの別れ）

冬が近づき、雪の便りがあちらこちらで聞かれるようになってきた。それと同時にたれちゃんをどうするかという話題も子どもたちの中から挙がってきた。「このまま飼おう」「農家の方に戻そう」いろいろな意見が挙がってきたが、「たれちゃんにとっての幸せは、どうすることか」を考え、話し合いを進めてきた。何度も話し合った結果、農家の方へ戻すことになった。そして、たれちゃんの卒業式を盛大にしようと計画を進めた。思い出の歌、手紙、飼育の思い出巻物など、子どもたちのアイディア満載の卒業式を小雪の舞う中、行うことができた。

3 成果と課題

(1) 成果

子どもたちの思考の流れを大切に活動を行うことをとおして、以下の力を付けることができた。

- ①ヤギの飼育活動を小屋の設置等、一から行うことを通して、命の大切さや命を育てる責任感を味わうことができた。
- ②地域の方から様々な協力をいただくことにより、地域への愛着や誇りの気持ちを高めた。
- ③ヤギの糞を畑の肥料として再利用させることで、環境を循環していく大切さを感じる事ができた。
- ④ヤギの飼育活動を通して、「命」が一つしかないこと、かけがえのないものであることを理解した。

1年間の活動をとおして、子どもたちはヤギの「たれちゃん」と出会えて一緒に生活できたことを心から喜んでいて、自分たちの力だけでは解決できないことも自分たちの地域にはそれを解決できる知恵や技術を持った方がいて、その方から支援をいただけることを感じた。そして、この地域で生まれて生活できることに感謝の気持ちを表していた。「ふるさと」への愛着や誇りの気持ちを高めていったことが伝わってきた。また、ヤギ飼育の達人から学校に来ていただいたことによって、命の重さ、命の尊厳を感じられたことは大きな成果とつながった。

(2) 課題

今年度、ヤギの飼育をとおして、「ふるさと力」を生かした命の教育は、前述のように大きな成果を得られた。来年度は、どんな活動を中核に据えて活動するとよいか模索するとともに、2年生生活科の中型動物飼育における子どもたちと動物の出会いや様々な活動を工夫していきたい。